

翻刻 北村喜八作「ユージン・オニール」

Kihachi Kitamura, “Eugene O’Neill”:
A transcript of a radio play山名 章二¹¹大妻女子大学Shoji Yamana¹¹Otsuna Women’s University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：北村喜八，ユージン・オニール，啓蒙的評伝，ラジオ劇

Key words : Kihachi Kitamura, Eugene O’Neill, Basic critical biography, Radio play

抄録

これは草稿転写の報告だが、解説に詰めも残しており、資料の紹介ノートと呼ぶのがふさわしい。原本は日本放送協会のラジオ放送劇の脚本で、金沢市在石川近代文学館に北村喜八関連資料の一として所蔵されている。放送は日本の連合国軍への降伏からほぼ三年後、1948年8月であった。築地小劇場に始まり演劇界で広範に活躍し、英米さらにドイツの文学作品を幅広く翻訳出版、数多の著書を公刊、晩年には日本の劇界を代表して国際的に活動し、その中でオニールにも上演に翻訳に深く取り組み続け、文通もあった北村喜八の執筆による。その内容はオニールが波乱の青年期を終え演劇に確固たる基盤を築く頃をセリフ劇形式で跡付け、その後の主要戯曲および近作情報を紹介し、オニールの一層の活躍への期待も込められている。1946年初演の *The Iceman Cometh* はいち早く触れられているが、没後25年を経て公開するよう遺言されることになる *Long Day’s Journey into Night* への言及はない、当然ながら。

アメリカ文化に大いに関心を寄せその影響も色濃い1920年代、30年代の日本がアメリカ演劇を受容した熱気を戦後に復興しようとする意欲をも窺わせる資料である。

はじめに

本翻刻は石川近代文学館所蔵の「北村喜八自筆脚本原稿『ユージン・オニール』」を底本とする。

訂正加筆挿入は徒らに整理せず再録に努めた。解説次第ながら、執筆の深層を窺わせることもあるからだ。その意味でも、誤字、誤綴、単純な書き損じと想われる場合も、忠実に転写し、(ママ)と書き添えてその旨を示した。

また、旧仮名遣いは言うまでもなく、旧漢字は再現に努めた。確立していたと思われる略字はそのままにし、後に新漢字として認められる略字くずし字の併用も推測された場合は、旧漢字に統一した。

そして、解説が困難な場合は一字単位で□に代え、また、抹消の意向が明らかな場合、解説可能な箇所は再現し、不可能な場合は□を当てた後、それぞれに打ち消し線を重ねた。さらに、改筆加筆部分は文字数に拘らず前後を〔 〕のように囲った。手書きならでの自由な訂正挿入についても同様に表記した。なお、欄外の書き込みは各葉の初頭に書き添えた。解説が詰めきれない場合は、該当箇所の後に(?)を添えその旨を記した。

本来の縦書きを横書きに、句点読点は本ジャーナルの書式に従いピリオドとカンマに換えた。

正確を期す場合は原本に当たられたい。

[] [別人の筆による第一葉は罫線のないタテ17cmXヨコ24cmの用紙に、まず、放送局名、放送日時、番組名、企画タイトル、そしてこの回の内容が記されている。ついで、おそらく放送時のスタッフの作業に対する指示らしきものを交えて、担当アナウンサーに宛てた番組紹介文が続く。

興味深いことに、番組シリーズ内の順位を示す部分が空白のまま残されている。]

第一放送〔続いてエンピツで 23年 と付記あり〕
八月十一日（水）后五.三〇 — 六.〇〇
学生の時間

“ノーベル賞に輝く人々”

「ユージン・オニール」

北村喜八作

X X X X

テーマ 上・・・下・・・下にもつ
アナ 学生の時間が参りました
テーマ 上・・・下・・・下にもつ
アナ 毎週水曜日のこの時間は「ノーベル賞に輝く人々」について御紹介して参りました
今日はその〇回目と致しまして北村喜八作「ユージン・オニール」をお送り致します
X X X X

[] [次いで「脚本」自体になる。用紙は1行20字、1頁20行、400字詰、タテ18.1cmXヨコ25cmの縦書き原稿用紙である。しかし、その第一葉に当たる最初の一枚には数字の書き入れがない。そして、次葉以降、改めて脚本の対話部分からなる延べ三十葉が順次番号を振り当てられて続く。]

八月十一日（水）后五.三〇 — 六.〇〇 第一
学生の時間

“ノーベル賞に輝く人々”

ユージン・オニール

北村喜八

話し手一、船員、ウェブスター（俳優）。

話し手二、オニールの父、ジョージ・クック。
話し手三、ジミー坊主、ラティマー。
話し手四、オニールの兄。
ユージン・オニール
母 —— オニールの母、スザン・グラスペル。

[1]

音楽。

話し手一 一九一一年 —— ニューヨークの波止場に「ジミー坊主」といふ酒場があった。荒くれた船乗りや波止場人足を相手のもぐり酒場である。酒場にすぐ続く奥の部屋では、ビールを大コップで一杯ものめば、テーブルにもたれて眠りながら一夜を明かすこともできるし、街の淫売をつれこむこともできるといった風のところである。酒場の主人はジミー坊主といふ綽名のいかにもふさはしい男だ。青白い、ほっそりした、髭のない顔、柔和な青い眼、白い髪、それには前掛よりも僧侶の衣のほうがずっと似合ひさうである。彼の口のきき方や物腰からして、誰でも彼をこの波止場の顔役だと思ふにちがいない。言葉づかいも、物腰も、穏やかで、もの静かである。~~しかし、~~ [が、] この柔和な影には、假面の下にかくれた彼の^人となり —— 皮肉で、苛

[2] [右半分の上縁に筆記体で（以下同じ）Eugene O'Neillと記されている]

酷で、石のやうに冷酷な人間を感じる事ができる。

話し手二 この酒場に、背の高い一人の青年がぶらぶら ~~しながら~~ 暮らしてゐる。ほっそりとして背が高く、針金のやうに強靱だが、その物腰は、~~少々~~ 内気で、神経質で、いつも當惑してゐるやうであり、その眼は絶えず果しない夢を追ってゐるやうに見える。これが當時二十三になった放浪時代のユージン・オニールである。

汽船の警笛の音 — 時々きこえる。

話し手一 ジミー坊主はスタンドの向うに腰をおろし、眼鏡ごしに夕刊をよんでゐる。
ユージン （はいつてきて）只今。

話し手三 (ジミー坊主) ああ、ジエンか。今夜は馬鹿に早いぢやないか。仕事にあぶれたのかい。

ユージン いや、河岸を ~~うろ~~ [ほっ] つき廻っていたんだ。

[3]

ジミー坊主 何かころがってゐたかい・・・どえらい好運でも。

ユージン ~~おれ~~ [ぼく] は船乗り相手に海の話をしたり、青い海の向うの水平線をぼんやり眺めてゐたりするのが好きなんだ。ぼくあ、また船に乗りたくなつたよ。

ジミー坊主 ~~さうかい~~ じゃ乗るさ。・・・
~~だが、ここに居候してゐるからって、それを苦にするにや當らないんだぜ。~~

警笛。

ユージン 警笛の奴、いやに唸りあがるな。・・・今夜はととも深い霧だぜ、ジミー。

ジミー坊主 さうかい。

ユージン どこもかも濛々と烟つてゐて、船の灯が ~~□つたやうに~~ ぼつと光つてゐるだけだ。

船員が一人はいつてくる。

話し手一 (船員) よう、今晚は。

ジミー (ママ 以下同様) (□愛嬌をふりまいて)
シップ・アホーイ！ いい航海だった

[4]

かい。

船員 有難 ~~い~~ [う]。まあ、一杯くれ。

ジミー (□ [職] 業的に) 何にいたしやしようか。

船員 ウイスキーをもらはう・・・アイリッシュ・ウイスキーだ。

ジミー へい。

船員 ジミー坊主ってお前さんのことかい。

ジミー へえ、さやうで。

船員 実は船乗りがひとり至急にほしいんだが、誰かゐないかね。

ジミー お前さんどうしてここへききにおいでなすつたんだね。

船員 急場の用ならジミー坊主のとこへ行って

みろって言はれたもんでね。

ジミー なるほど。

船員 あした、サザンプトン行の船が出ることになってるんだが、船員が一人、急に病気になる ~~りやが~~ ったもんで困つてゐるんだ。

[5]

ユージン 僕が行きませう。

船員 君が・・・？ 君は船乗りがやれるのかい。

ユージン 僕は船から下りたばかりですよ。

ジミー坊主 この若えのは、ベノスアイレスからイギリスの不定期船で帰ってきたばかりなんだ。おれが保証するよ。

船員 何だつてまた南米 ~~□~~ [くんだり] へ出かけたんだ ~~い~~ [ね]？

ユージン ~~さあ~~ 理由はきかれても困るが、[なにね、] 行きたくなって行つたまで ~~だ~~ よ。見知らぬ土地が見たくなって、家を飛びだして船に乗つたまでなんだ。

船員 無鉄砲な奴だな。

ユージン おかげで、向うぢやさんさん苦労しましたよ。ベノスアイレス □ アルゼンチンで、電気会社で働いたり、羊毛の運送店につとめたり、ミシン会社の外交員になったり、いろんな商賣をやつたが、とう □ 落ちぶれて、ベンチの上で寝るつて始末さ。

[6]

そこでまた [ぞろ] 船に乗つてこっちへ舞い戻つたつてわけでさあ。

船員 じゃ、君は会員證を持つてゐないんだらうな？

ユージン いや、持つてゐますよ。これでさあ。 ~~アルゼンチン~~ [ベノスアイレス] にゐる □、資格をえたんだ。海の生活がすっかり気に入つたもんですからね。

船員 じゃ、おれの船へ来てくれるかい。

ユージン どうだらうね、ジミー。

ジミー坊主 お前がその気なら行つた方がいいぜ。

船員 船は「ニューヨーク」号だ。イギリスのサザンプン [ママ] へ行くアメリカ定期船だ。二

番ドックに碇泊してゐるから、すぐ分かるよ。
~~ユージン~~ ~~ぢや、参りませう。~~
 警笛の音。寂しくかすれて行く。
 話し手二 これがオニールの二番回目の、そして最後の、船乗り生活であった。

[7]

ジャズ風の音楽。
 話し手二 翌年、船から戻ったオニールは、またジミー坊主の酒場でごろごろしてゐた。その中、思ひがけないことで多少まとまった金が手にはいったので、飲めや騒げやのランチ気騒ぎにつかかってしまった。
 音楽。汽車の走る音に変わってゆく。
 話し手一 ふと目がさめると、オニールは汽車の中に眠ってゐる自分を発見した。
 オニール (暗く) おれは何だつて汽車なんかに乗ってゐるんだ。酔っぱらった揚句に乗ったものと見える。はて、切符を買ったかな? …… あっ、あるある! ニューオーリンズ …… 何だつてこんな遠くまでの切符を買ったんだ?
 汽車の停る音。雑沓。
 話し手一 列車はニューヨークニューオーリンズ直通の列車であった。オニールも仕方なしにニューオーリンズの駅に下りる。

[8] [左半分上縁にJames O'Neill / Monte Christo (ママ) / Ella Quinlan と記されている]

雨の音。
 話し手二 春にはまだ早い冷たいミゾレまざりの雨が降ってゐる。オニールはあたりを見廻した。芝居の大きなポスターがふと目についた。見るともなしに見ると、ジェームズ・オニール主演、モンテ・クリスト ……
 オニール なあんだ。親父はこんなところで巡業してゐたのか。こいつあ全く偶然だ。よし、ニューヨークまで歸る旅費をせびってやらう。
 音楽。
 話し手三 オニールの父のジェームズ・オニールはアイルランドの出身で、当時一流のアメリカの俳優であった。ハムレットやオセロを演じてもうまかったが、デューマの「モンテ・クリスト」~~の~~ [を] ヴォードヴィル風に脚色した

ものを演じて大當りをとってからは、それをもってアメリカ全土を巡業してゐた。母のエラ・クインランはアメリカ

[9] [左半分上縁にBetts Academy at Stamfordと記されている]

中西部の生れで、女学校時代から美しい娘で、ピアノが上手であった。しとやかな、信心深い性質だったので、父と結婚してからも、~~いつも~~父と一しょに巡業して歩いてゐたが、決して舞台の仕事に関係しようとしなかった。~~むしろ、舞台の空気をいやがってゐる位であった。~~ ユージン・オニールは一八八八年十月、ニューヨークで生れてゐる。ジムといふ十才年上の兄がある。兄弟は幼年時代、父の巡業に伴はれて、~~殆んど~~ アメリカ全土を巡業して歩いてゐる [た]。オニールは七つの時、カソリックの小学校へはいった。その寄宿舎で六年を過ごした。一九〇二年、コネチカット州の港町であるスタムフォードのベッツ・アカデミ (ママ) に入学した。一九〇六年、そこを卒業して、その秋プリンストン大学へはいった。しかし、~~夢想的で、熱情的なこの少年にとって、大学生活はもはや興味をひかなかつた。~~ 彼は一年でそこを飛び出した。十九の時

[10]

である。~~その時から彼の放浪の生活が始まるのである。~~
 話し手一 大学を飛び出した彼は、父の関係してゐるニューヨークの通信会社にしばらくつとめた。しかし、間もなく、或る鑛山技師につれだつて、中央アメリカのホンデュラスの金鑛探険に出かけた。六ヶ月の終りに、一攫千金の夢は空しく破れて、彼はひどいマラリアに冒されて歸ってきた。そして、父の許へ歸つた彼は、父の劇團のマネジャーの助手をしながら、東部から中西部へと巡業して廻つた。しかし、その生活も長く續かなかつた。コンラドの海の小説「ナーシサスの黒ん坊」を讀んでゐるうちに、夢みがちなこの少年の心は、遠く海の上へ引きつけられて行つた。彼は又しても父の許を飛びだして、ノルウェーの帆前船に身を投じてペノ

スアイレスへ行った。転々たる放浪の生活……

音楽。

[11]

話し手三　そして今、思ひがけなく、父の巡業先であるニューオーリンズへ来たのである。

話し手二　恠しい雨の降る楽屋は……オニールは、はかりかねて、ふと佇んだ。

話し手四 (ジム)　おい、ジエンぢゃないか。どうしてこんなところへ来たんだ。

話し [オニ]ール　ああ、ジム兄さん……
ジム　お前、馬鹿にしよげ返った顔をしてゐるなあ。どうしたんだ？

オニール　お父さんに、ニューヨークへ帰る旅費をかりようと思ふんだ。

ジム　駄目だよ。お父さん、貸すもんか。

オニール　だって、兄さんだってよくやるぢゃないか。

ジム　お父さんは今、舞台だ。僕は自分の役がすんだんで、一寸宿へかへらうと思つてみたところだ。一しょに行かう。お父さんに會ふ前に、お母さんに會つた方がいいぜ。

[12]

音楽。

母　まあまあ、ジエンぢゃないか。よく帰つておいでだねえ。

ユージン　しばらくでした。〔お母さん、〕お変わりありませんか。

母　一体、お前、どこで何をしてゐたんだね。

~~ジム　またどっかをうるつき廻つてゐたんですよ。~~

~~母　お前もすこし落ちついて勉強したらどうなんだね。~~　もう一度大学へ戻る気はないのかい。お父さんもお前が大学を卒業してくれるのを、どんなに望んでいらっしゃるかしれないんだよ。

ユージン　僕、大学にもう興味がありません。……それよりお母さん、ピアノをひいてきかして下さい。

母　どうして突然そんなことを言ひ出すんだね。

ユージン　僕、~~船~~〔海〕の上で時々お母さんのピ

[13]

アノの音を思ひ出したんです。

ジム　おい、ジエン、お前また船に乗つたのかい。

オニール　アメリカ定期船にのつて、サザンプトンまで行ってきたよ。海員の資格もとつたよ。

ジム　ぢゃ、一そ船乗りにもなるといいんだ。

母　まあ、お前つたら、世界〔中〕をあっちこっち飛び歩いて、~~一体何になるつもりなんだね~~〔……〕

話し手一　父は劇場から帰つてきた。

話し手二 (父)　~~わたし~~〔お父さん〕はお前の常軌を逸した生活を見てみると、どうしたって気狂ひとしか思へない。お前をどう扱つたらいいのか分からないんで、お父さんはほとんど思案にあまつてゐるよ。お前には何か人と変わった特別の才能があるのかもしれない。しかし、お父さん〔として〕は、お前が落ちついて、何かきまつた職業についてくれたらと思ふ

[14]

よ。

ジム　お父さん、ジエンはニューヨークへ帰る旅費をほしがつてゐるんです。

父　そりゃ旅費くらゐやつてもいいよ〔さ〕。やつてもいいが、また放浪して歩くのが関の山だらう。……おい、ジエン、お前がニューヨークへ帰りたんなら、自分で稼いで旅費をつくるがいい。でなければ、お父さんの一座にはいつて、しばらく落ちついたらどうだ。

汽車の音。

話し手三　汽車はコロラド山脈を越えて、ユタ州のオグデンへ向かつて〔西へ西へと〕走つてゐる。列車にはジェームズ・オニールの一座が乗つてゐる。小さな役を振られたオニールは、座席の片隅で一心に台本を讀んでゐる。

ジム　どうだ、ジエン、セリフが覚えられたか。

オニール　~~初めてのことで、~~〔うん、それ

がね、すっかり] 覚えたつ

[15]

もりなんだが、いざ舞台に立った時に~~覚~~ [すらすら出てくる] かどうか自信がないんだよ。

話し手一 なに、大丈夫でさあ。心配することありませんよ。

オニール ウェブスターさん、あなたは舞台の経験が長いから、そんな風におっしゃるが、何しろ僕 [に] は初めてですからね。あなたが一つの芝居で三つも [ちがうん] 役を受け持っているんで驚きましたよ。

ウェブスター すこし馴れりや何でもありませんよ。それに、いくら一流の一座でも、むやみと人数が多くちゃ、旅興行は成り立たないから仕方ありません ~~よ~~ [や]。

オニール なるほどね。

ジム どうだい、ジェン、お前も兄さんのやうに、お父さんの一座で役者に~~なってみないか~~ [たらどうだ] [なる気はないかい]。

オニール しかし、こんな芝居をやっているんぢゃ詰まらないなあ。こさへもので、嘘っぱちで……

[16]

ジム 生意気言うねえ。

オニール 僕は芝居ってものは、人生のもっと真実な姿をかいたもんでなくちゃ意味がないと思ふんだ。

ジム ぢゃ、お前がさういうのを書いてみるさ。

列車の音、音楽へ変わる。

話し手二 ~~オニールがモンテ・クリストの中の端役で、初めて舞台に立ったのは、ユタ州のオグデンであった。それから四ヶ月、父の一座に加はって西部太平洋海岸を巡業して歩いた。五月、シーズンの終わりとともに、オニールは父の夏の別荘のあったコネチカット州のニュー・ロンドンへ落ちついた。~~

話し手一 彼はこの町でテレグラフといふ新聞の記者になった。編集長をしてみたのが、フレデリック・ラーティマー (ママ 以下同様) といふ男であったが、彼はこの夢想的で、激しい

気象 (ママ) の青年を愛した。暇さへあれば議論を

[17] [左半分上縁にWallingfordと記されている]

闘はし、またいろいろの書物をかしあたへた。

話し手三 (ラーティマー) 君は人生や社會にたいして過激な思想をもってゐるやうだ。わたしは君の考へには反対だが、君の考へは、人生に対して求めるところが多く、而も人生からうちひしがれたところから来たのかもしれない。君は何かをもってゐる。ひとつ小説でも書いてみたらどうだ。傑作が出来るかもしれないよ。

音楽。——爆発的で狂燥的なものから、急に静かなものになる。

話し手二 その年の十二月、オニールは健康を損ねて倒れた。医者から結核の徴候ありと宣告された。大学を飛び出した十九の年から発病した二十四の年までの、足かけ六年間の無軌道な放浪生活が、健康を虫ばんだ (ママ) ののである。コネチカット州のウォリングフォードのサナトリウムへはいったのが、クリスマスの前位であった。

[18] [左半分上縁にRippinと記されている]

話し手三 六ヶ月の療養生活は、彼に深い内省の時を与へた。彼は [放浪時代に] さまざまな人間の、さまざまな生活を見た——彼らが苛酷な世間に対するときの偽善的な態度や假面だけでなく、そのかげにかくされてゐるそれぞれの思想や眞実な [心の] 姿を。「君は小説でも書いてみたらどうだ」——ラーティマーのさう言った言葉が耳の底でひびく。父の舞台が目の前にちらつく。……

オニール さうだ、脚本を書いてみよう……そこから自分の才能を見つけることができるかもしれない。

遠い波の音を、ずっと聞かせる。

話し手一 ロング・アイランドの海峡に臨んだ、リップピンといふイギリス人の家庭がある。退院したオニールはそこに寄寓して療養生活につとめた。入院する前の彼と ~~は~~ [くらべると] それは別人のやうであった。手に負へない浮浪の少年も、今は、己の夢想と情熱を内面生活に注

いで、静かな規則正しい生活を

[19]

おくる大人に生れ変わって来た。

話し手二 彼は手当たり次第に読書した、ギリシヤ古典劇、シェイクスピア劇、そしてイプセンやストリンドベリーをはじめとするあらゆる近代劇〔作家〕の作品、かうした読書のかたはら、彼は夢中になって創作に没頭した。

話し手一 水泳の上手な彼は、寒い冬でも泳ぐのを日課にし、また夜はベッドを野外に持ち出して寝るのを習慣にした。

話し手三 かうして、一年間の療養生活に書いた戯曲が、〔十数篇に達した。〕~~一幕物十二、長篇三つ。しかし、その中五つを、活字として残し、あとは破棄してある。~~

この辺から波の音なし。

話し手一 戯曲の原稿は父の出版屋へ送られた。

話し手三 俳優の子供の書いた脚本に碌なのがあるもんか。

[20] [左半分上縁にBakerと記されている]

話し手一 出版屋はさう言って取り合はなかった。

話し手四 そこで彼は自費出版を思ひ立って、父にその費用をたのんだ。

父 父さんは買手のない脚本を書いても仕様がないうやうに思ふんだが、~~ねえ~~。何だってまた船乗りのこんな汚らしい生活ばかり書くんだねえ。しかし、お前の病気がなほって長生きするなら、何とか物になるかもしれない。

話し手四 かう言って父は自費出版の費用を出してくれた。新しいアメリカ戯曲の開拓者としてのオニールの〔處女〕戯曲はかうして出版された。一九一四年、「~~飢~~その他の一幕もの」と題するのがこれである。しかし、それは殆んど買手がなかった。

話し手三 当時ハー ~~ズ~~ [ヴァ] ート (ママ) 大学には、ベーカー教授の指導する〔演劇科があった。〕有名な四十七番教室というのがそれである。オニールは一九一四年の秋、そこへはいっ

[21] [左半分上縁にWharf Theatreと記されている]

て、一年間本格的な劇作の勉強をした。
音楽。

話し手一 ~~一九一六年、第一次世界大戦の二年目である。~~ 当時のアメリカの若い知識人の間には、アメリカ演劇を〔して〕ヨーロッパの模倣的性格から脱 ~~し~~ [せしめ] て新しい近代劇を打ち建てようとする気運がウツボツとし漲って来た。ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジに集まる若い藝術家の一群が、〔夏、〕マサチューセッツ州のプロヴィンスタウンといふ漁村にあつまって、自分たちの作品を自分たちの手で演じる計画を立てた。

話し手三 波打ちぎわに建ってある小さな魚置き場の小屋を改造して、彼らの実験劇場とした。「波止場劇場」といふのがこれである。

話し手四 一九一六年の夏、トランクに自作の原稿を一ぱい詰めこんで、この素人劇場を訪れた青年がある。ユージン・オニールである。

[22] [右半分上縁にGeorge Cram Cook / Susan Glaspellと記されている]

波の音。

話し手 ~~二~~ [四] この劇團の中心人物はジョージ・クラム・クックといて、四十をすこし出た、大きな男であった。活動的で、忍耐強く、いつも一座のものを鼓舞して来た。夫人のスザン・グラスペルは三十位で。既に劇作家として名を現はして来た。

[話し手四 (ママ) 一九一六年の夏・・・]
波の音、大きくなり、時々蒸汽船の音。

話し手二 (クック) ねえ、オニール君、これがわれわれの実験劇場だよ。波止場劇場って名前をつけたんだ。□前、魚の置き場に使ってたんだが、去年の夏、みんなで劇場に改造したのさ。僕自身、カンナとノコギリをもって働いたよ。・・・これが舞台だ。間口十二フイート、奥行十フイート。客席の木の椅子は七十ばかりあるかな。・・・全くの粗末な小屋だが、われわれはここから新しいアメリカの演劇を生み出す意気込みであるんだ。君の脚本もこの舞

台で初

[23] [右半分上縁にBound East for Cardiffと記されている]

めて脚光をあびるわけだ。

オニール はあ。

グラスペル ~~トランクに~~ 自作の脚本を [トランクに] 一ぱい詰め~~て~~ [こんで]いらした~~の~~ [って噂のあるの]はあなたでしたか。

オニール [(笑ひ顔で)] ええ。

グラスペル 今度、あたしたちがここでやることになった「カヂフをさして東へ」は、あなたが一番自信のある [お]作~~品~~ですか。

オニール さあ、一番自信があるかときかかれると困りますが、自分でも [は]気に入ってある作品の一つなんです。全部読んでいただくのも大変~~です~~ [だと思ひました] からと思ひましたから、取りあへずあれをお目にかけてたんです。

グラスペル あたし、あれを拜見して、本当に新鮮な感じがしましたわ。

オニール 有難う。

クック この舞台は粗末だが、君の海の戯曲を上演するには ~~持ってこいものになる~~ [全く打ってつけだ] よ。窓をあければ海が一目に見えるし、満潮になれば、波が建物の前を洗ふし~~て~~ 渡は [・・・]

[24]

オニール おや、こんなところからしぶきがあがってあますよ・・・床のすき間から。

~~クック~~ [グラスペル] 満潮で浪の荒い日には、お客さんの足元の濡れることがあるんですよ。

クック ねえ、オニール君、霧の深い日にはプロヴィンスタウンの港から ~~汽~~ [警] 笛がきこえてくるんだよ。そんな日にでも君の脚本を上演したら音響効果が ~~いらない~~ [なしですむ] ってわけだねえ。

オニール 偶然といへば偶然でせうが、こんな似つかわしい雰囲気の中で、あなた方のやうな熱心な方々の手で、僕の脚本が上演されるのは本当に幸福です。

グラスペル オニールさん、あなたも一役買って舞台へお出になりませんか。

オニール ええ、やりませう。

クック 君の脚本は全く人生の生~~ま~~ なましい一片を引きちぎってきたやうな感じだ。僕はこれからの戯曲はかういふ方向へ向つ

[25]

て行かなきやならないやうに思ふんだ。さういう意味で、今度の舞台 [上演] はアメリカ演劇の歴史にとって記念すべき舞台になるだらうと思ふよ。

静かに音楽がはいつてきてゐる。

話し手四 一九一六年夏、彼の「カヂフをさして東」へが (ママ) プロヴィンスタウン劇団によって上演され、オニール自身も二等運轉士の役を演じた。それ以来、彼の一幕ものは次々と若い劇団の手で上演された。

話し手三 彼は内気で、神経質で、孤独を愛する藝術家である。よほどの余儀ない場合の外、レストランで食事をする事さへ稀であった。彼はプロヴィンスタウンにあ

話し手一 ~~る人命救助のための~~ [る溺死を見張るために建てられた] 古い小屋に住んで、執筆に没頭した。[そして、□□□くたびれると海へ飛びこんで泳いだ。] 一枚の毛布にくるまり、足元に石油ストーヴをおいて、ペンを走らせる若い日のオニールの姿がそこにあつた。かつてはあんなに乱暴に酒をのんだ彼も、

[26] [右半分上縁にmorosco (ママ) 及び Beyond the Horizonと、左半分上縁には Emperor Jones (ママ) と記されている]

執筆にあたっては一滴の酒も口にしなかつた。

話し手一 一九二〇年、最初の長篇戯曲「地平のかなた」がニューヨークのモロスコ劇場で初演された。それはアメリカにおける近代的リアリズム手法による初めての長篇戯曲として、アメリカ演劇にとって記念すべき作品である。

話し手二 ついで同じ年ニューヨークでプロヴィンスタウン劇団によって初演された「皇帝ジョーンズ」は、文明社会に生活した一人の黒人の潜在意識を取りあつかひ、一種の一人芝居の

形式をとった、主観的傾向のつよい作品で、オニールの劇作家としての地位を確固たるものにした。

話し手三 オニールの戯曲の強味は、人生そのものの生きた姿を舞台へ持ちこんだことである。従って、セリフは乱暴な俗語の類をどしどし取り入れ、生きいきとした力強いリズムと躍動感をもってゐる。

[27] [右半分上縁にAnna Christie / Hairy Ape / All God's Chillun Got Wings / Desire under the Elms / Strange Interlude / Mourning Becomes Electraと記されている]

話し手四 「アナ・クリスティ」「毛猿」「すべての神の子 ~~は~~ [に]翼あり」「楡の木かげの愛慾」、次々と問題作を提供し、彼自身、世界的レベルへ肉迫するとともに、アメリカの演劇のために大きな道を切り開いた。新しい作家たちは彼のあとに續いて續々と登場してきた。

話し手一 一九二八年の「奇妙な幕間狂言」、一九三一年の「喪服の似合ふエレクトラ」にいたって、彼は ~~高き~~ [藝術家として円熟の] 頂点に達した。

話し手二 「奇妙な幕間狂言」は二部九幕から成る大作で、三人の男と交渉をもつ一人の美しい知的な女性の、二十五年にあまる生活を描き、その特殊な立場と心理を浮彫のやうに示してゐる。心の底にかくされた心理を独白や傍白によって示し、形式の上でも新しい境地を開いてゐる。それは近代劇 ~~——~~ 後の世界的傑作であると言っても過言ではない。シアター・ギルドによって上演され、高度な藝術作品であるにかかはらず、

[28] [右半分上縁にAh, Wilderness / Days Without Endと記されている]

一年六ヶ月のロングランとなつてゐる。

話し手三 一九三二年の「ああ、荒野」、翌々三四年「限りなきいのち」を發表。それ以来、作家として長い沈黙におちいった。

すこし前から音楽がはいつてゐるが、この時高まる。

話し手四 一九三六年、輝かしいノーベル文学

賞が彼の頭上に輝いた。

遠く、戦争の行進、飛行器の音など、戦争の音響、かすかに。

話し手一 第二次世界大戦。ドイツ軍のフランスへの侵入は、オニールにとって隣りの農園に戦車のバク進してきたやうな不安をあたへた。ヨーロッパ、とくに彼の愛するフランス文化の、戦争によって崩れゆく様子は、彼にとって耐へがたいことであつた。

話し手二 彼は過去二十年にあまる作家としての活動によって、二百万ドルといふ莫大な収入をえたとはいはれてゐる。当時彼はカリフォルニアの宏荘(ママ)な農園に住んでゐた

[29]

が、戦争によって召使たちは次々と軍務に赴いた。自動車を運轉することのできないオニール夫妻は、離れ島に打ちあげられたやうな状態になつた。

話し手三 精神的にも生活の上でも激しい打撃をうけた彼は、中風症麻痺といふ病気にかかり、六ヶ月、瀕死の病床に横は(ママ)つた。

話し手四 戦争の終結とともに、彼の十二年の長い沈黙を破つて、「氷人來る」がニューヨークで上演された。

話し手一 ここでは、若き日の放浪時代となじみ深い「ジミー坊主」の酒場が舞台にとられ、人生の敗残者たちの夢と幻滅とが語られてゐる。

明るい音楽が盛りあがる。

話し手二 彼は十二年の長い沈黙の間に、アメリカの一家族の百年にわたる運命を描いた野心作の大部分を完成したといふ。

話し手三 戦争によって崩れさつた世界の中にあつて、今、彼の精神的苦悩には大きく

[30] [右半分上縁におそらく放送スタッフにより -23行 / 27分40秒 と記されている]

深いものがあるにちがひない。彼はその苦悩をとほして、われわれにまた何か偉大なものを示すにちがひないのである

付記

以上で転写を終えた資料は、その冒頭の一葉にあるように「八月一日（水）」、鉛筆による加筆があり、また、暦でも確かめると一九四八年の夏に放送された日本放送協会ラジオ第一放送の脚本である。（なお、スタッフの筆跡と覚しい記入によれば、総数 25 部のうちの一点のようである。）

この脚本が他にも所蔵される興味深い顛末をめぐる書簡などと同様、北村喜八とオニールをめぐる研究を推進し、また、日本の文化がアメリカ文化アメリカ演劇を受容し、さらには、北村が劇場の内外を問わずオニールに取り組んでいた時代と社会を十分に踏まえて、その文化的な実相を探求する資料の一とされるべきことは言うまでもない。

さらには、第二次世界大戦終了後ようやく三年になる時期に、当時最も伝播力の高いメディアであったラジオ放送によるこのような企画が可能になった事情を発掘することで、連合軍による統治政策の一側面として、その方向性を見、戦後日本の歩みの一端を明らかにすることにも貢献する素材の一であろう。

資料閲覧以来すでに十年を超えるが、アメリカの劇文学に視野を絞りがちな筆者は寡聞にして他の言及を知らぬまま、予備的にではあれ、資料の存在を公表することに意義があると考え、このよ

うに紹介することとした。特にオニール、その日本における受容をめぐる考究の契機の一ともなれば喜ばしいと考える次第である。

謝辞

ここに紹介した資料は、畏友山本俊一氏の数度の示唆に促されて金沢市にある石川近代文学館で行ったオニール関連の調査中に発見した。興味深い関連資料に混じっていたのである。氏の透徹した博搜に敬意を表し、友情に感謝する。

短い金沢滞在中には、後にそれよりも前に同文学館々長でもあったと聞いた井口哲郎氏にも会え、初対面にもかかわらず、様々なご指導をいただくことになった。そして、帰京後には、同郷の誇りも込めて取り組みを続けられたと推察する、自身の北村喜八研究の成果をお届けくださった。同好の後輩を見出し喜ばれてか、資料を自由に用い発表を進めるようにとの激励をいただきながら、報いられないままである。慚愧に堪えない。また、同文学館学芸員室の前多令子様、松山千津様にも寛大かつ細やかな対応に与った。厚くお礼申し上げます。

（受付日：2019年3月29日，受理日：2019年4月12日）

山名 章二（やまな しょうじ）

大妻女子大学名誉教授

専門はアメリカ演劇。現在はユージン・オニールの後期戯曲について、劇中に登場する「作家人物」

に焦点をあて、オニールの自伝的特性とからめた読み解きを行っている。

主な著作：ユージン・オニール 自伝と鎮魂（単著，東京，成美堂）

罪悪感をからくも逃れて—『終わりなき日々』の結末をめぐる右往左往— 『人間生活文化研究』2016, 26, 551-71 URL http://journal.otsuma.ac.jp/2016no26/2016_551.pdf